

自然と人間との共生

# KOSMOS

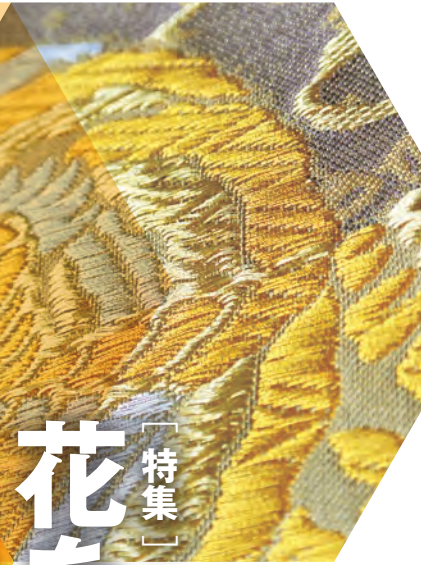
公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90  
FOUNDATION

2019  
春

第5号



「特集」  
花をめでることは  
生命をめでること

# 花をめでることは 生命をめでること



私たち人類は、古来、花と暮らしてきた。花は華とも書く。しかし、絶頂期の花だけが華ではない。新芽の息吹きに生命誕生を、新緑の葉には邪悪を排除する力を、枯れゆく姿にさえ美と輪廻の期待を見だし、祈りを捧げてきた。鮮やかな色で、凛として力強く、ときにはひっそりと咲く花たちの頼もしさ。私たちはみずからのことばにならない心情や、癒えない思いを託す。花は私たちがいかに魅了しているのだろうか。

アジサイの名所として知られ、「あじさい寺」ともよばれる明月院(鎌倉市)の花想い地蔵。

特集

02 花をめでることは  
生命をめでること

●対談

花に心奪われる日本人  
湯浅浩史×池坊専好

●探究コラム

●酒井章子  
●湯浅浩史  
●池坊専好

14 私を育てた〈風と景〉  
人生は庭が教えてくれた  
須磨佳津江

16 いぶぎの輪っか  
葵とギフチヨウの饗宴  
葵祭の立役者  
秋道智彌

18 近代学匠伝  
コスモス国際賞二〇一八年受賞者  
オキユスタン・ベルク博士

21 日本植物紀行  
可憐なのにたくましく、  
したたかにいのちをつなぐスミレ

22 協会事業紹介  
花とみどりの復興活動支援助成事業  
大槌町鹿子踊  
「神の森どろのきプロジェクト」

24 はかなく、清く、深く——  
日本の伝統園芸植物  
桜章  
江戸の将軍もはれこんだ桃色の花

## 対談

# 花に心奪われる日本人

湯浅浩史

一般財団法人 進化生物学研究所理事長兼所長

池坊専好

華道家元池坊次期家元

**湯浅** ● 私は、世界各地の民族と植物の関わり方を研究しています。これまで六十か国以上を訪ねましたが、調査地では天気予報を新聞でチェックします。ところが、まず海外の新聞には植物や花の情報が載っていない。(笑)

**池坊** ● 日本では、桜の開花時期にしてもモミジの色づきにしても、情報は新聞から得ますね。

**湯浅** ● しかもカラー写真で。植物の開花予想が新聞に載るなんて、日本だけ。日本には独自の花を楽しむ、活用する文化があることを実感しますね。いけばなもその一つだと思います。

専好さんの心に残る花はなんですか。

**池坊** ● 自然の花より、生けた花の印象が強いですね。毎日たくさんの方がお稽古にこられるので、幼いころから多様な花を見てきました。特定の花を意識することなく、一年をとおしてたくさん草木を見ていたので、どれもいつも新鮮に美しく感じます。なかでもうつむいたユリの姿が好きです。

**湯浅** ● 私が最初に印象に残っているのは、自宅

に植えられていたソテツ。

**池坊** ● 南方系のソテツは、茶人で作庭家の小堀遠州が好んで庭に植えていますね。異国情緒豊かですから、子ども心にも印象的だったでしょうね。

**湯浅** ● 花だと、小学五年生のときにウォルト・ディズニーのドキュメンタリー映画『砂漠は生きている』で見たサボテンの花。あまり雨の降らない過酷な環境に耐えて、雨が降るといっせいに美しい花を咲かせる姿に驚きました。多肉植物が好きになったのはそれからで、いまもその興味がつづいています。(笑)

## 『万葉集』が伝える古人の思い

**湯浅** ● 三千年前のテキサスに住んでいた先住民のモンゴロイドは、サボテンの花を食べていたそうです。

**池坊** ● 果肉ではなく、花をですか。

**湯浅** ● ええ、リュウゼツランやユッカの花も食用にしています。排泄物の化石、糞石を分析すると食生活が推定できるのですが、内容物の八割



(左)アンコール・トム(カンボジア)の石仏。白いハスが供えられている。  
(右)パリのヒンズー教では、ヤシの葉の器に色鮮やかな花びらを盛りつけたCanang sariとよばれる供物を毎日新しく用意して、神がみに捧げる。

をサボテンなどの花粉が占めることもあります。ところが、同じ時代の縄文人や弥生人の花との関わりを示す確たる証拠はないのです。文字はないし、絵も残っていないからです。すると、もともと古くて確かな資料は『万葉集』でしょう。

**池坊** ●『万葉集』には、古人の歌がたくさん詠まれていますね。

**湯浅** ●四千五百十六首のうち、三分の一は花や木などを詠んだもの。天皇から庶民にいたるまで、すべての階級の人たちが歌っている。

**池坊** ●ウメやハギが多いですね。

映像や写真のない時代に、みずから野に出かけ、植物を前にして歌われたことだと思うと、当時の人たちの感性の豊かさを感じますね。

**湯浅** ●いけばなにハギは使いますか。



**ゆあさ・ひろし**  
1940年に神戸市に生まれる。1968年、東京農業大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。東京農業大学育種学研究所所員、進化生物学研究所研究員、東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授を歴任。2011年に退任。2014年から一般財団法人進化生物学研究所理事長・所長、前生き物文化誌学会会長。1994年松下幸之助花の万博記念奨励賞受賞。



楊洲周延『千代田の大奥』の「茶の湯廻り花」(1895年)。千代田城(江戸城)の大奥の年中行事や奥女中の暮らしを描いたもの。(出典・国会図書館デジタルコレクション)

**湯浅** ●『万葉集』では、ハギの花見のようすが歌われたり、形見としてハギを植える歌があったりします。

「恋しくは形見にせよと我が背子が植えし秋萩 花咲きにけり」(巻十・二一九番)。たとえば防人として辺境の九州に行くとき、

野の花を庭に植えることは、ほかの国でもみられますが、動機まではあまり知られていません。『万葉集』は動機を歌として残している。

**池坊** ●『万葉集』で歌われるのは自然の花ですね。生けた花はないのですか。

**湯浅** ●一つだけ、大伴家持がユリの花を室内で飾りに使った歌が巻十八にみられますが、当時はまだ、花を水にさす慣行はなかったのでしょうか。『白露の置かまく惜しみ秋はぎを折りのみ折りて置きや枯らさむ』(巻十・二〇九九番)。ハギ

の花を折ったけれど、さて、どうしたらよいかわからないという歌もありますね。

## 京都・六角堂で始まったいけばな

**池坊** ●『枕草子』の時代になると、瓶に花を挿す描写が出てきます。

**湯浅** ●水に挿す習慣は、仏教に関連して始まったと私は考えています。専好さんがご住職の頂法寺六角堂は、いけばな発祥の地ですね。

**池坊** ●初代住職の小野妹子が仏前にお花を供えたのが、華道の始まりとされています。仏教が伝来し、これに関わる習俗が日本に広まるなかで花を仏に奉る慣習が浸透したのでしょうね。

**湯浅** ●池坊の伝統的な様式である「立花」は水を使いますね。

**池坊** ●立花は大自然の縮図といわれています。花器の口と、生けた花との境は「水際」とよばれ、あらゆるエネルギーが凝縮する接点です。私たちがとても重視する部分です。おそらく、西洋のフラワー・アレンジメントには見られない造形と考え方でしょうね。

生ける花は、左右非対称に置かれるのが原則。上に向かってまっすぐに立つ花もあれば、垂れるものもあります。違った個性の植物を取り合わせるの、いけばなの特徴の一つです。

**湯浅** ●日本ではお墓に参ると容器に水を注いで、花を上に向けて挿します。欧米のお墓だと、花輪を置くか、土に花を直接に投げ入れます。ヨーロッパの花飾りやフラワー・アレンジメントは、

水から切り離されていることが多い。

**池坊** ●植物本来の姿として、水を吸い、天に向かって伸びます。植物本来のあり方を再現したいという思いが、日本人の自然観の根底にあるのかもしれない。

## 植物の「いのち」を強調する

**湯浅** ●「花を立てる」ことの始まりが気になって、言葉として残る記録を調べたことがあります。すると、室町時代に花を立てた大沢久守が書いた『山科家礼記』には、宮中に向いて花を飾った記録が細かく記されています。最初のほうは「花立られ」と書かれていましたが、そのうちに「立花」になっていきます。この書には、「心」ということばも出てきます。池坊では「真」とよぶ、最初に立てる枝のことです。

**池坊** ●『山科家礼記』には、どんな場所に、どんな器と花材を使って花を立てたかがわかりやすく記されています。当時、よく真に使われていたのは、マツなどの針葉樹です。

**湯浅** ●門松にもつながるかもしれませんね。ヨーロッパでは伝統的に針葉樹は飾りません。クリスマスツリーが生まれたのは中世以降です。

**池坊** ●日本人がだいにす

るマツもヒノキも、常緑の植物です。つねに生き生きとした姿に敬意を払い、願いを込める意識が強いのでしょうか。

明治時代のいけばなに使われた花と現代の花とを比べると、花の種類は倍に増えていて、カラフルな花を好む傾向が強まっています。古い文献を見ると、緑といってもむかしの人は深い緑、ちくちくした緑、つややかな緑など、緑の細やかな違いを理解して使い分けている。感じます。

**湯浅** ●日本人は、葉への関心も高いですね。いけばなでは、いまでもユリ科のハラン(葉蘭)のような目だつ葉がよく使われます。ヨーロッパでは、葉だけを飾ることはまずない。

**池坊** ●むかしの人はハランを見て、陰陽の概念や哲学を見出したところがおもしろいですね。池坊では、光のあたり方によって花形、花材に陰



**いけのほう・せんこう**  
1965年に京都市に生まれる。父は華道家元四十五世・池坊専永。1988年に学習院大学国文科卒業。2015年に京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。1989年11月に得度し、法名・専好を授与され、次期(四十六世)家元継承者となる。2015年11月から「池坊専好」として活動を開始する。

にあります。とくに、白や黄のまだらや縞模様が葉に入った斑入りです。江戸時代後期に出版された『草木錦葉集』は、形の変った植物だけを集めた本です。未完ですが、それでも千を超える種類が紹介されています。欧米や中国で斑入りの植物を好むようになったのは、十九世紀から二十世紀になってから。

**池坊** ●ある種の奇形、正統派ではないものを集める感性は、いけばなの美学にも通じますね。いけばなでは、枯れた葉や虫食いの葉も好みます。



すよ」という印象を与えなければいけない。たんに形の造作を整えるだけでは不十分で、「内在する命の動きがなければ生きているとはいえない」という考え方です。

**日本独自の花文化**

**湯浅** ●インドの花飾りには、花首から摘み取った花を組み合わせてつくられたものが多いです。インドに近いスリランカに、シーギリヤ・ロックとよばれる岩山があります。その山の頂は父を

**湯浅** ●いけばなの構図は不安定に見えて、じつは均整が取れている。中世以降のヨーロッパの花壇もきれいだけれども単純な幾何学模様を中心。

**池坊** ●いけばなの器も、一見すると不安定です。基本は下が細く、上部はボリュームがあるからです。生けた花の造形も左右対称ではありませんが、重量的なバランスはとれています。

いけばなは静止していても、「止まって見えてはいけない」とよくいいます。人間が走り出すときは足を踏みこんで前傾姿勢になるように、「これから動き出しますよ」といいます。



『花王以来の花伝書』(華道家元池坊総務所 所蔵)  
現存する最古の花伝書とされるもので、室町時代中期にいけばなを成立させた池坊専慶(生没年不詳)よりもすこしあとのいけばなの姿を示している。立て花にくわえて、掛花(かけはな)や釣花(つりはな)など、さまざまな花が描かれており、いけばなが人びとの生活に浸透していたようすを知ることができる。



池坊専好さんの作品。花形は、現代の空間に応じた立花として、1999年に当代の家元池坊専永さんが発表した立花新風体。

と陽を設定し、それらが調和することによって命が成り立つと考えます。ハランは葉の表裏とも主脈から左右を見て広いほうが「陽」、狭いほうが「陰」と見分けがつきやすく、また日本のどこでも季節を問わず手に入れやすいため、よくお稽古に用います。

**湯浅** ●『山科家礼記』を読むと、たくさん葉が使われていたことがわかります。ハランはもちろん、オモトやギボウシ、ゼンマイもそうです。初期の立花(たてはな)の時代からすでに、葉と花を組み合わせて生けていました。

江戸時代に流行した伝統園芸の特徴も、葉物



(左)スリランカ中部のマータレーにあるシーギリヤ遺跡。垂直に切りたった岩の頂上に水路なども備えた王宮が築かれていた。(右)岩山の中腹の壁面に女性たちの姿が描かれていて、「シーギリヤ・レディ」とよばれる。





スリランカ中部の世界遺産キャンディにあるダラダー・マリガーワ寺院。釈迦の大歯が納められているとされる。

だったはずですが。

**湯浅** ● 中国でも古くから花を瓶に挿していたようですが、一種類の花を飾ることが多く、いくつもの異なる個性の草や木と花を組み合わせる日本のいけばなとは、根本的に違います。

その中国の花文化にも、変遷の歴史があります。当初は観賞用としてよりも、実用的な使い方が多く、漢字にもそのことが表れています。たとえば、「梅」の字に母があるのはなぜか。つくりの「每」が表すのは、結婚して鬢を結い、髪飾りをつけた女性です。では、なぜこれが「ウメ」の漢字に使われるのかというと、母親になるには梅が必要だからです。女の子が生まれると、梅の木を植えました。十三年ほどで実が実りますが、当時の中国で十三歳というと結婚する年齢です。結婚して妊娠すると、つわりが起き、酸っぱいものがほしくなる。そのときに、ちょうど実り始めた梅の実でつくった梅干しを食べるのです。

殺害して王位を奪った王が逃げこんだ、という場所です。その頂に向かう途中の壁面に、手に花を持つ女性の姿が描かれています。描かれて千五百年以上たったいまも、きれいに色が残っていて、手に持つ花の種類がはっきりとわかります。茎のついたスイレンやハスの花も描かれています。平たい器に載っている花や、頭の花飾りなどは花首から摘み取ったものです。

**池坊** ● 平たい器なら、花首だけを飾るほうが見栄えがよいかもしれませんが、縦長の器で美しく見せようとする、おのずと茎を挿すこととなります。花器が横長から縦長に変わったことは、人の草木の捉え方、接し方の大きな転換点

**池坊** ● 先日、京都大学の山極壽一総長と対談をする機会がありました。そのときに山極総長は、花が動物に食べられてしまったら実ができないから、植物は花を奪われないようにどのように

生けることはもちろん、花にあわせて花器を変えたりもする。暮らしの行事としても、花は密接に関係します。

**湯浅** ● でも、エアコンの時代になり、季節感がだんだんと失われていませんか。

**池坊** ● かつてない猛暑に襲われるなど、異常気象で季節ごとの空気感の違いを感じにくい時代かもしれない。若い人たちにいけばなを教えていると、それぞれの季節に咲く花の知識や季語など、日本人に共通する認識が失われつつあると感じます。歴史や先人が花に託した思いなどの背景を詳しく説明しないといけない。感性だけを伝えるのは難しい。

いっぽうで、東日本大震災を経験して自然の脅威に気づいた若い人たちが、自然との向き合い方を知りたいという思いから、いけばなを始めることも増えているんです。

**湯浅** ● パソコンやスマートフォン普及で、実物を見なくともバーチャルな世界で満足するような時代です。若者たちが本物の植物を見て、接して、利用するにはどうしたらよいか、私も学生を教えながら悩んできました。(笑)

**池坊** ● 「むかしはよかった」で終わらせず、いろいろな分野の人たちと連携して、知恵を出しあいつながら、いけばなを伝える発信方法を考えられています。先日は二条城で、「フラワー・ス・バイ・ネイキッド(FLOWERS BY NAKED)」というイベントに参加して、花を生けました。私のいけばなと映像とが一体化する趣向です。プ



興福寺での献華式。2011年の頂法寺(六角堂)での献華を皮切りに、災害による慰霊復興、人びとの幸せとを平和を願い、西国三十三所巡礼献華を執り行なった。

ロジエクシオン・マッピングで城内に秋のススキを立体的に映し出したり、映し出されたモミジの絨毯を踏み歩くとその葉が飛び散ったりする演出もありました。私たちの暮らしに溶け込んでいるデジタル・アートのツールで、日本の四季を発見してもらうことが目的です。

デジタルという、若者にとっては身近で訴求力のあるものをきっかけに、人と生の植物との距離感を縮める方向に導ける可能性を感じました。

**湯浅** ● どのような体験をどれだけするかは、人の成長に重要ですからね。

**池坊** ● 池坊では、京都を訪れる修学旅行生にいけばな体験をしていただいています。いまの若い人たちは、実際に花を触り、水に触れる機会が

してきたかという話をされていました。

**湯浅** ● 梅はたくさん花が咲きますから、少々食べられても問題はないでしょう。ただ、花が一つしか咲かないような植物には、しばしば動物が嫌い、薬にもなる成分を含みます。シヤクヤクは芍薬と書くように、まさしく薬の字が入っています。龍胆(リンドウ)も薬用からついた名です。

さらに中国では、香りに由来する花名もあります。ジンチヨウゲの漢名は瑞香。日本で出回っている香り豊かな植物の多くは、やはり中国原産です。いけばなは、香りは重視しませんか。

**池坊** ● 香りの強いものは、むしろ避けます。食欲がわくようなものなど、花以外のものに気をとられてしまうものは避けますね。

**湯浅** ● インドや東南アジアでは、香りのよい花が仏さまに捧げられます。ジャスミンなどは、傷んでも香りが残りますから好まれますね。

**池坊** ● 日本での香りの供養には、線香が使われます。**湯浅** ● ヨーロッパの人たちも香りが好きです。むかしは日本のお風呂にあまり入りませんが、香り、香りで紛らわしてきた歴史もあるのでしょう。

### 消えゆく季節感をよび覚ます

**湯浅** ● 欧米でも季節に応じて飾る花は変えますが、日本ではとくに季節感をだいにししながら花を飾りますね。花が季語になっている。

**池坊** ● 掛け軸を変えたり、食器を変えたりと、室内の装飾がそうでものね。移ろう時の流れを楽しむ文化。いけばなでも、季節に応じた花を



毎年1月初旬に催される初生け式では、日本各地から約1,500人が一堂に会し、初生けを行なう。8歳から33歳までの若手会員が集う会場では、会員の生ける花に専好さんがアドバイスをする。

少ないですからね。枝の曲げにくさや、切りにくさを知って驚く生徒さんは多いです。

**湯浅** ● いけばなは、目や耳だけでなく、手を使い、感触をいかしてまとめあげるものですからね。

**池坊** ● 大学ではグローバル化が叫ばれて、短期の海外留学などを積極的に実施していますが、そういうときだからこそ日本を、日本の文化を知ることがだいじだと、授業にいけばなを取り入れる機会も増えています。基本を知っていれば、現地野草や葉、枝でもいけばなができます。花を通して互いの国を理解できるし、コミュニケーションの道具にもなるはずですよ。

**湯浅** ● 熱帯には熱帯の、寒冷地には寒冷地に適したすばらしい植物があります。そういう植物を用いた池坊さんのいけばなをぜひ見てみたいですよ。(笑)

**池坊** ● 海外には、私たちが日本で目にするのではない花がたくさんあります。そうした植物との出会いもまた楽しいです。

## 都市の中の花の可能性

**湯浅** ● 幼稚園や小学校では、花を植え、育てる取り組みが情操教育として実施されていますね。でも、そうして屋外で育てるだけでなく、私は部屋の中に花を飾る、花をアートとして愛でる文化の方面にも拡げてほしいのです。いけばなは、床の間など、日本の家屋に適した飾り方で発展してきました。でも、いまは家の構造がずいぶん変わってしまった。

**池坊** ● むかしは床の間があり、ご家族が花を生ける姿やそこにいけばなが飾られているのを見るのが一般的でした。

ライフスタイルや生活環境の変化でそういった文化が乏しくなったのは残念です。それぞれの家庭で季節の花を飾ることが当たり前前の環境づくりができれば、もっと豊かな社会が到来すると思うのですよ。

たくさんの方が都市の中で暮らして、忙しい毎日を送っています。そうした殺伐とした時代だからこそ、花や緑を取り入れたいという動きがあります。ただ新しい建物を建てる、室内を整えるだけでなく、自然との共生に配慮する精神や美意識が求められる時代の到来ではないでしょうか。

**湯浅** ● たしかに室内だけでなく、居住環境もたいていそうです。

**池坊** ● いけばなは本来、野山をくまなく歩き、どの植物が日当たりのよい場所を好むのか、高く成長するのか、いつ咲くのかなどを実際に見ながら理解して成りたっていました。でも、現在の都市では、見栄えがよくて、育てやすいものばかりが生まれ、整備される傾向があります。



池坊専好さんが副住職を務める頂法寺(六角堂)で新調されてまもない大提灯を見上げるお二人。聖徳太子が創建したと伝えられる六角堂は、池坊が代々住職を務め、いけばな発祥の地とよばれている。

## 探求コラム ①

# 熱帯林下に艶めくタツカの謎

京都大学生態学研究センター 准教授 酒井章子

なのだから。

動物でも植物でも、雄と雌とが交配し次の世代が生まれる。昆虫や鳥のきらびやかな装飾や美しいさえずりは、たいてい雄が雌を引きつけるため、交配を達成するために進化したものだ。花が植物の器官の中でもっとも多様性に富み、美しいのも、それになぞらえることができる。けれど決定的な違いは、動物ではそれは異性に向けたものだが、植物の場合には花粉を運ぶ仲人、たとえば花に訪れ花粉を運ぶ昆虫に向けたものだという点だ。動物は自分で交配相手を選ぶけれど、植物が選べるのは仲人だけであり、自分が交配した相手がだれであったのかを知るすべはない。なんとプラトニックな交配!

その不自由さの故か、植物は仲人に交配を託すありとあらゆる方法を進化させてきた。いうまでもなく、人が花の香りや美しさ、多様性を楽しめるのはその結果である。わたしたち花の研究者は、植物の私生活にさらに一歩踏み込んで、誰が交配の仲人しているのかを調べる。変わった花であるほどおもしろい発見を期待し力も入るが、順調に研究が進むかどうかは運次第だ。わたしや仲間の研究者が敗戦を重ねているのが、タツカである。タツカを含むタシロイモ科は、

一属のみが熱帯に分布する小さなグループだ。しばしばコウモリや悪魔に例えられる、一風変わった花序をつける。花序から垂れる長いひげや上に伸びる大きな苞(まぶ)に目を奪われがちだが、花も怪しく艶めかしい。

わたしの調査地のボルネオの熱帯林で、この植物の花を初めて見たのは二十年以上前。こんな奇妙な花であれば、さぞかし変わった仲人がやってくるに違いないと、花を見るたび何時間も張り込んだりカメラで監視したりしたが、残念ながらいまだその現場をおさえることができていない。

やはり中国に分布するタツカで仲人を見つけられなかった植物学者は、この植物はもっぱら同じ花の雄しべと雌しべで交配しており仲人もたない植物なのだ、と結論づけた。しかし彼らも認めているとおり、それでは奇妙な姿を説明できず、わたしはこれを疑わしく思っている。辛抱強く調べ続けていけば、仲人はいつかその姿をあらわすのではないだろうか。

研究者は、謎を秘めた植物に片思いする。いつの日か、タツカの花はいつか誰を待っているのか、つきとめたいと思っている。

さかい・しよこ ● 一九七二年に千葉県に生まれる。京都大学大学院理学研究科博士課程を修了。スミニアン熱帯研究所P.D.研究員、筑波大学生物科学系講師、京都大学生態学研究センター助教授、総合地球環境学研究所准教授などをへて、二〇一三年から現職。



マレーシア・サラワク州ランビルヒルズ国立公園のタツカ。雌しべも雄しべもドーム状の構造をしており、外から見ただけではドームの下側にある花粉や柱頭(花粉を受けとる場所)を見ることはできない。この写真では蚊が訪れているが、雄しべの下に潜り込むことはないで、彼らが花粉を運び、仲人となることはない。



探求  
コラム ②

# 花の来た道

人類と花との関わりは六万年前にさかのぼる。イラク北部のシャニダールの洞窟遺跡からヤグルマギクやタチアオイなどの花粉が死者のそばから発見されている。これは死者に手向けたか、薬草として利用したとみられている。

一方、象徴花は五千年前に古代エジプトが統一された際、青スズレンが上ナイル地域のシンボルとして、下ナイル地域のパピルスと共に扱われたのが最初である。さらに古代エジプトでは胸飾り、神殿の供花に青スズレンやヤグルマギクが使われ、四千五百年前の墓からは水鉢に生けられた青スズレンの花、蕾、葉のレリーフが見いだされている。ただし、それは例外で、以降のギリシャ、ローマ時代をはじめ、ヨーロッパでは花冠、花輪、花束の利用はさかんだったが、近世まで花が水に生け飾られることは少なかった。イギリスですら庶民が室内で花を水にさして飾るのは、十九世紀半ば頃からとされる。

## 日本の園芸は万葉時代から

観賞のための花栽培は、あたり前のようだが、現代でもなお、花を全く作らない民族は少なくない。私が調査したマダガスカル南部のアンタンドロイ族・南米ギアナ高地の裾に暮らすマキリター

## 湯浅浩史

レ族やペモン族、ニューギニア高地のダニ族、台湾蘭嶼のヤミ(タオ)族などは、花がどこに生えているかはよく知っていても、利用しないものは名をつけず、まして栽培には無関心であった。

花栽培は食用の穀物、果物、野菜、また油料や繊維、染料などの有用植物の栽培に較べると、世界各地でその歴史は遅い。中国は花卉園芸の中心地の一つだが、対談でも例をあげたように多くは食用や薬用の実用から観賞に転じている。日本も花卉園芸の分野では独自の発展をとげたが、一般には江戸園芸と呼ばれるように江戸時代の園芸が注目を集めている。しかし、日本の花栽培は今から千三百年近くを遡る万葉時代に確立されていた。

『万葉集』から渡来のウメ、モモ、ケイトウなど十四種類と日本在来のハギ、ヤマブキ、フジ、アセビ、サクラ、ツバキ、ユリ、ナデシコなど十六種類が、庭で栽培されていたことがわかる。なかでも大伴家持は二十一種類の花を栽培し、うち日本産ではウツギ、アジサイ、ツツジ、マツを除く十二種類を数え、ナデシコは種子を播いて育てていた。大伴家持は日本最初の園芸家といえ、野の花から庭の花へと日本園芸の伝統も万葉時代にすでに花開いていたのである。

探求  
コラム ③

# まじろぐごとなく 草木の「生」を見つめる

「いけばな」を定義づけた室町時代後期の僧、池坊専応の著した『池坊専応口伝』には、「枯れた花にも華がある」という意味のことが記されています。秋から冬に季節が変わると、草花は枯れてゆきます。

枯れるのは生きているからこそ。生から死への過程であり、春の到来の兆しです。季節が刻々と変化するように、「いのち」も同じ状態にとどまることなく、つねに変化しています。

## いけばなは「足でいけばな」

『池坊専応口伝』は先人たちが積み重ねたいけばなの智慧をまとめたものです。表面的なうつくしさを賞讃するにとどまらず、ときには枯れ枝まで用いながら、自然の姿を器の上に表現することの意義を主張しています。

まとめられたのは、応仁の乱を契機に京都が戦と混乱のさなかにあった時代です。死をまじかに意識する日常のなかで、植物のいのちや生きる姿そのものに共感し、その祈りを投影したのかもしれない。

いけばなの根底には、生きるいのちへの共感が流れています。「いけばなは足でいけばな」とい

## 池坊専好

われませす。植物がどのような場所で咲き、どんな性質をそなえているかを実際に見て、感じなさいということなんです。そうすることで共感が生まれ、共感はいのちの尊重につながるのです。



池坊専好さんが2019年1月5日の初生け式でいけた「穂(おだやか)」。難を転じてしなやかに、静かで平穏な年となるようにと思いをこめている。

## 一草の魅力は多勢にまさる

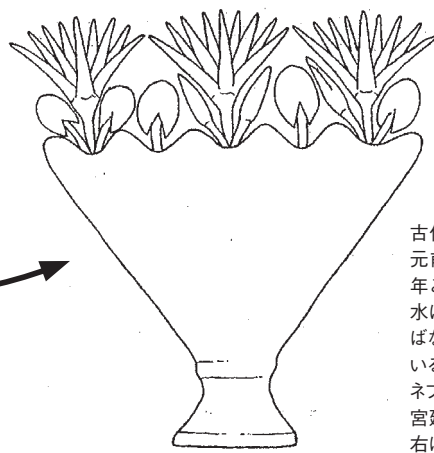
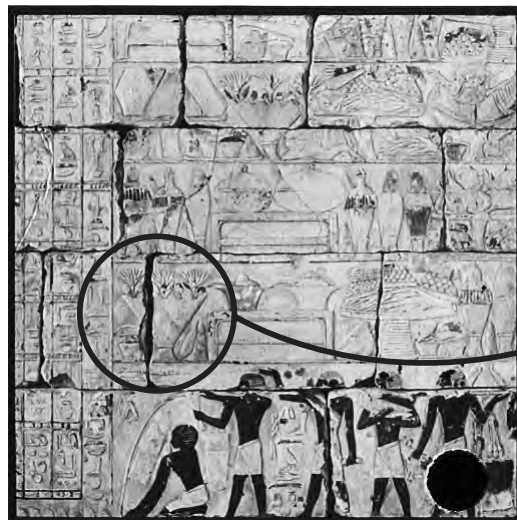
池坊の様式の一つ「立花」は、多様な草木を組みあわせるなかで調和を生みます。たくさん草木を集めて形をなすのではなく、最小限の花や葉、枝を使い、一瓶に自然の景観美や森羅万象を凝縮して表現します。

少ない花材で表現することを「乏しさの美」とよびます。枯山水などに代表される「引き算の美」と共通するものです。池坊の教えに、「数少ないは心深し」という言葉があります。

「数少ない」調和が成立すると、一つひとつの草花がきわだちます。すると、うつくしい部分のみならず、枯れたり変形したりと、欠点とされるものも同じように目立ちます。しかし、貧相ではありません。たいせつなのは、一木一草をていねいに見つめること。枝が曲がっているのは、激しい雨に打たれたからか、強い風にあおられたからか。そうした積み重ねがあつて、その草花のいまの姿があります。

草花の一生に思いを寄せ、その良さを引きだすのが「いけばなのこころ」なのです。こうした姿勢は、価値観や生まれ育ちの違う多様な人たちから成りたつ私たち人間世界にもあてはまるかもしれません。(かたまり)ではなく、自立した個として、一人ひとりを見つめる。

いけばなを学ぶことは、わざを習得するだけでなく、いのちを見つめ、そのいのちを尊ぶ姿勢のたいせつさを知ることになるのです。



古代エジプト第五王朝(紀元前2498年から前2345年ごろ)の墓の壁画には、水にさした世界最古のいけばなのレリーフが描かれている。埋葬されているベルネブは王の正装を担当した宮廷の役人。左は写真で、右はそのトレース図。



## 私を育てた 〈風と景〉

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かびあがる「心象風景」……。たいせつな「風と景」について語っていただきます。

近くの野原でつかまえたカブトムシと遊ぶ。小学4年生のころ。集合写真は大好きな理科の先生と同級生たちと昆虫採集にでかけたときの一枚



# 人生は 庭が教えてくれた

須磨佳津江  
(フリーアナウンサー)

私が花や緑を好きなのは何故だろう。いつ頃から好きだったのだろうか、時代を遡って考えてみた。幼い頃、東京は今のようによく建物が集積しておらず、身近に野原があつて、タンポポをつんだり、オオバコで草相撲をしたり、ツクシをとって、袴を外して佃煮にしてもらったり、シロツメクサで花のリングをつくり「王冠」などと言って遊んだりしたものだ。

我が家は狭いながらも庭があり、玄関前にはシロロやハマユウ、縁側からはヒマラヤスギが見えた。子どもだったので、大きく見えたかもしれないが、毎日のように、お向かいのお医者さんの愛犬コロがヒマラヤスギの垂れた枝の下にもぐり、背中をかいていたのを思い出す。ツツジやイチハツが、季節になると花を咲かせ、イチハツがたくさん咲くと、母がチョンチョンと伐つて、新聞紙にくるみ、「教壇に飾るときれいだから、先生に渡してね」と持たせてくれた。なんとも長閑な時代だった。



## 庭は生きものの知恵を学ぶ 教科書

ヤマザクラが黒いさくらんぼをつけると、採って食べた。柿やブドウも実を付けた。グミの木もあって、熟す手前の赤さの薄い実を味見したら、渋くて、以後手を延ばさなかつた思い出もある。ジュズダマもあって、お手玉の中に入れたり、おままごとのご飯がわりにして遊んだものだ。

そうそう、小さな緑色のアマガエルを捕まえて、庭の竹垣に置いておいたら、数日後、アマガエルの色が枯れ竹の色になっていて、びっくり！生き物には身を守るために保護色になる技があることを教えてもらった。アゲハチョウの卵がサンショの葉っぱだけについていて、何故なのだろうと不思議だったことも覚えている。アリの行列をたどって巣を見



2018年に訪れた、5月の数日だけオープンするオープンガーデンにて。花の組み合わせの見事さに感嘆

つけ、巣穴の下はどうなっているのかと知りたくなったり、マサキの垣根につくジグモ採りに夢中になり、そっとひっぱって筒状になった巣が空っぽだと、どこに行つたのだろうと探したりもした。庭は幼き私にとっては、身

近な自然であり、遊び場だったのだ。

父が突然ピースというバラの苗を買ってきて、これは黄色い立派な花が咲くんだと、土を掘って植え、ニコニコしていたこともあった。母と共に花屋に行き、春になるとわずかに出回るパンジーやデイジーの花苗を買って、庭に植えたことも懐かしい。たぶん、両親ともに花が好きだったのだろう。

ガーデニングなどという言葉のなかった、半世紀以上前の話だ。

## 花がひきよせる新しい出会い

その頃の体験が、もしかしたら、今の私の根っこを作ってくれたのかもしれないと最近感じている。NHKのアナウンサーになり、リポーターや、インタビュアーをするとき、好奇心旺盛で、何故？ どうして？ をディレクターに質問しまくって、苦笑されたことがあったが、それも、自然界の不思議をみつめ、知りがついていた子ども時代の思い出につながるような気がしてきた。

その後、様々な番組を担当したが、「趣味の園芸」という番組に運命的に出会い、育て方だけでなく、花や緑の豊かさ、深さを知った。さらに、番組へのお便りがきつかけで、オープンガーデンの存在を知り、まだ日本に生まれ始めたばかりのオープンガーデンの動きを取材して、その魅力を発信するようになった。「花や緑が人を笑顔にするのは何故か？」から始まり、「自宅の

庭を誰にでも開放するオープンガーデンをするのはなぜか？」を知りたいと思ったことがきっかけだったのだ。

そして、知れば知るほど、「花育て」は人を育てることを知り、一人でも楽しめるが、花仲間ができること、喜びを共有できるし、思いを共感すること、もっと幸せになることを知った。さらに庭を開くことで、心が社会へ開き、新たな人生を拓いている人々に各地で出会った。

「花や緑は幸せの扉を開く！」。私は、笑顔が広がる社会になってほしいと願い、多くの人にそのことを伝えるようになったのだ。

最近花仲間と誘われて、野の花を見に軽い登山もするようになり、自然の雄大さ、植物の生命力に、生きる力ももらっている。自然も花育ても思い通りにはならないがそこから学ぶことばかり。何より、今も発見の連続にワクワクし、心がふんわりと癒されるのでやめられない！私は、花や緑、自然に生かされ、人に恵まれて今があることをしみじみ感じ、感謝の日々を送っている。



すま・かつえ  
東京都に生まれる。東京女子大学を卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。その後、フリーランスとなり、多数の番組を歴任。【趣味の園芸】では、1994年から2005年まで、司会を担当。現在NHK「ラジオ深夜便」アンカー。





# 葵とギフチョウの饗宴 葵祭の立役者

地球上では、さまざまな動植物がたがいに助けあい、利用しあいながら、生命を育んでいます。私たち人間もその輪を形成する要素の一つです。生きものどうしの連環、そして、そこに関わる人間の役割にふれるサイエンス・コラムです。5号からは世界各地をフィールドワークし、歩いてこられた秋道智彌さんの目をおして「輪っか」を語っていただきます。



**あきみち・ともや**  
理学博士(東京大学)。1946年に京都市に生まれる。国立民族学博物館、総合研究大学院大学、総合地球環境学研究所などで教授を歴任。専門は生態人類学。

**秋道智彌**  
山梨県立富士山世界遺産センター所長  
総合地球環境学研究所名誉教授  
国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授

毎年、五月一五日になると、京都の町は華やかなお祭りを迎えます。それが葵祭で、上賀茂神社の大祭となっています。



上賀茂神社に到着した葵祭の行列の一行。葵と桂をかませた飾りを全員がつけている。

この祭りの行列は、京都御所から下鴨神社を経て上賀茂神社まで練り歩くもので、勅使代を中心にした本列と、女人列からなる斎王行列からなっています。行列に参加する勅使、斎王代、女官、それに牛車などはすべて葵と桂の飾りをつけています。

## 葵と桂のシンボリズム

なぜ、葵と桂が葵祭に使われるのでしょうか。上賀茂神社は天武天皇期(六七八年)に造営された神社で、正式には賀茂別雷神社と呼ばれます。祭神の賀茂別雷神は、自然を司り、あらゆる災禍や穢れを祓う力をもち、水をもたらし、あるいは洪水をおさめるとされてきました。つまり、平安京遷都以来、宮中や京の町に水を供給する水管理者としての役割

割を担ってきたのです。

上賀茂神社では、北側にある神山に降臨した賀茂別雷神を山頂の磐座からふもとに御阿礼所の神籬に移し、その神籬を祭場である神社に運んでいます。

賀茂別雷神のお告げによると、「我にあはんとには、葵桂の蔓で飾り、祭りをして待てば来む」とされ、御降臨を待つために葵と桂が当初より使われたことが分かります。葵と桂の枝葉をかませたお飾りは御葵桂と呼ばれます。

桂(カツラ)はカツラ科カツラ属の落葉樹で、高さは三〇メートルほどになります。双子葉で、葉はハート型をしており、葵祭で使われること

から「加茂桂」とも呼ばれます。一方、葵(アオイ)はウマノスズクサ科カンアオイ属の多年生草本で、葵祭に使われるのは双葉葵(フタバアオイ)です。

葵と桂は、葉の大きさや形がよく似ていますが、桂は雄で、天、陽を表し、葵は雌で、地、陰を表します。陰と陽の植物を絡めた飾りで神を呼び込む点は興味深いです。

## チョウと葵

葵の仲間で見目すべき点があります。日本の固有種であり、春の女神と言われるギフチョウは、親が葵の葉の裏に卵を産み、幼虫が葉を食べる成長することが知られています。ギフチョウの幼虫はウマノスズクサ科

のフタバアオイをはじめ、ヒメカンアオイ、ミヤコアオイ、ランヨウアオイなどの葵の仲間を食草としていますが、成長が遅く、局所的に繁茂している葵は、里山の荒廃や乱獲などにより、その数を減らしています。食草を失ったギフチョウも今や環境省の絶滅危惧Ⅱ類の指定を受けている希少種です。自然と人との共生の場



ヒメカンアオイの葉を食べたギフチョウは、美しい姿に変身する。(写真提供・三輪成雄)

である里山は、ギフチョウが生息する、生物多様性が豊かな場でもあったわけです。

## 葵と葵祭

葵の生育地はかつては上賀茂神社の周辺に多く見ることができました。しかし、森林開発や土地改変などにより、その生育地は激減してきました。葵祭を千数百年支えてきた葵は毎年、六千本以上、準備する必要があります。

こうした背景から上賀茂神社では、二〇一〇年からフタバアオイの再生を目指す「葵プロジェクト」を立ち上げました。このプロジェクトは通称、アフヒ(Afuhhi)と呼ばれて

おり、筆者も当初からプロジェクト推進にかかわってきました。アフヒは古代には葵の呼び名でした。「アフヒ」の由来には、神を饗応する日を意味する「饗ふ日」とか、花が目を仰ぐように咲くことから「仰日」が転じたとするほか、『万葉集』にも「後も逢はむと 葵花咲く」と詠まれ、「逢日」に由来するなどの諸説があります。葵が「会う、逢う」こ



葵を育てる里親は、地元の小学生たちだ。1年間、学校で育てた葵は上賀茂神社境内の「葵の森」に植えられる。下図右がフタバアオイで、左はカンアオイ。

と関連する用語であることはたしかでしょう。

京都市内の小学校の生徒に葵の苗を一年間育ててもらい、境内の「葵の森」に移植する運動が二〇一〇年当初から持続しています。徳川家ゆかりの静岡市にある葵小学校も植栽事業を担っています。また、福井県の鯖江市立待の「吉江あおい会」はフタバアオイの植栽を推進し、二〇一六年にはフタバアオイを六〇〇〇本あまり上賀茂神社に奉納しています。

## 葵と自然保護

古代より大切にされてきたフタバアオイが茂る森を再生するため、人

自然・文化を結ぶ仕組みが大きくその輪を広げようとしています。葵がギフチョウの食草であり、葵の保全はチョウの保護ともつながる多面的な活動でもあるわけです。

葵の葉に卵を産んで、その葉を食べる成長するギフチョウが、そのまま葵祭の行列のなかに溶け込んで、乱舞するさまを、優雅な葵祭はほうふつとさせてくれます。

葵祭の長い歴史は、自然と人間がかかわってともに生きてきたことを実感させてくれます。ギフチョウと葵は葵祭の影の立役者といえるでしょう。

葵は湿地の日陰に多く見られるが、近年はシカによる食害で数を減らしている。



# オギユスタン・ベルク博士

日本の哲学者、和辻哲郎が一九三五年に発表した著書『風土』。オギユスタン・ベルク博士は、この書籍に大きな影響を受け、和辻の風土概念を発展させた新たな学問領域「風土学(mesologie)」を切り拓きました。データと感性、自然と文化、肯定と否定など、二者択一を前提とする環境科学ではなく、その両方を認めるベルク博士の風土論は、自然と人間との関係を新たな視座からとらえなおすものでした。

ルネ・デカルトが一六三七年に「我思う、ゆえに我あり」という命題を提唱しました。あらゆるものを疑った結果、疑い考える「我」の存在だけは確かだという考えに到達したときの言葉です。近代科学は、こうした意思をもつ人間という「主体」に対し、意思をもたない自然は「客体」と位置づけ、人間と自然とを分離し、対立する二元論の考えのもとで発展しました。「近代科学の思想ですすんできた結果、いま、動植物だけでなく、私たち人類にも絶滅の危機がおとずれていきます。行き詰まってしまった思想の



1984年、『風土の日本——自然と文化の通感』を書いていたころのベルク博士。フランス西南部のサン＝ジュリアンにて。

転換が必要です。(考える)だけで「私」の存在があるのではなく、社会や文化、まわりの生きもの、地球の存在、ホモ・サピエンスという種であることなども、「私」の存在の前提だとして、危機を超越する考えを構築する。これが風土学のめざすことです。



2018年、北海道を流れる千歳川のピオトープを調査。

## 自然は一義的な見方ができるものではない

ベルク博士の唱道する風土論は、二元論や人間中心主義とは異なる考え方で、その出発点となったのが、和辻哲郎の『風土』です。

「『風土』ではまず、「環境」と「風土」との違いが述べられます。環境は科学的に研究できる「客体」であり、それ自体で独立して存在するものです。しかし、風土は人間の存在と切り離すことができません。風土は人間の存在によって構築され、人間は風土との関係によって構築されると考えるのです。

「風土」の研究を深めるにあたり、ベルク博士のつくりだした概念が「通感性」です。二元論の価値観では、自然はたんなる環境です。しかし、自然の見え方は人によってそれぞれ違うはず。こうした関わり方に応じて変化する状態を「通感性」とよびました。「自然科学の方法で見ると、『風』はどんな状態でも同じものです。



2011年6月の立教大学での講演。1979年から現在まで、フランス国立社会科学高等研究院の教授を務めている。

### 叡智の人の足跡

ベルク博士は、一九四二年にフランス保護領モロッコに生まれました。「フランスとは異なる価値観や宗教にふれて、西欧世界とは違った生き方ができると理解したことは大きな経験でした」。アラブ世界の研究者の父の影響で、東洋への興味を抱いたベルク青年。大学で地理学を学び、中国西部の、

研究を志しましたが、当時の中国は文化大革命で混乱の時期。「学んだ中国語や漢字の知識をつかえないかと、日本の研究にシフトしました」。一九七〇年、北海道大学にフランス語講師として着任。研究テーマを探そうと、毎日『北海道新聞』に目を通しました。「その土地で生きる人にとって

なにが問題なのかを、まずは理解しなかった。毎日欠かさず読んでいるうちに、北海道の人のものの見方をすこしずつ感じられるようになりました。そうして、北海道の開拓史の研究をはじめます。開拓当初、政府は酪農や小麦栽培など、北の土地に適した農業を薦めます。しかし、本州から入植した開拓民は稲作にこだわり、並々ならぬ努力で水田を拡大したのです。「開拓民たちが稲作にこだわった背景には、自然科学の客観性だけでは切り取れない、日本人と米との歴史的な関わりがあ

ると気づいたのです」と。



1970年12月、北海道大学外国人教師官舎。北海道の開拓史をテーマに博士論文を準備していたころ。



1974年の正月。長女と長男とともに宮城県塩竈市新浜を散歩した。

ときを同じくして、和辻哲郎の『風土』に出会います。「訳書で読んだ当時は、その主張の本質にまでたどりつけませんでした。数年後に原文にふれたとき、北海道での暮らしにもとづく実感や研究で深めた知見が理解を助けました。本州から移民として入植した人びとが、北海道の土地とどう向きあい、折りあいをつけながら利用したのか。こうした人間と自然との関わり合いは、新しい風土の誕生の過程でもあったのだと。北海道ですごした日々は、ベルク博士が風土論を導きだすために欠かせない熟成期間だったのかもしれない。

### 【コスモス国際賞】地球を救うアイデアに捧げる

花の万博から四半世紀以上、花博記念協会は「自然と人間との共生」を訴えつけてきました。地球のためにすぐれた業績を残した方を顕彰するコスモス国際賞は、2018年に26回を迎えました。



- 共生の理念の形成、発展に寄与すること
- 地球的視点に立ち、長期的な視野をもつこと
- 統合的な方法を用いた研究や活動であること

# 可憐なのにたくましく、 したたかにいのちをつなぐスミレ

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、土地開発や乱獲、外来種の流入や気候変動などの影響で、その生育域や数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。その成果は「プラント・フォト・ハンティング\*」と題して、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータベースのなかから特徴的な種をとりあげて紹介します。

\*学会や展示会などへの動画(DVD)の貸し出しもしています。  
https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html



タチツボスミレ。スミレとともに古くから親しまれてきた種。スミレは根元から葉が出るが、本種は地上にのびた茎に葉がつく。

スミレ。草原のような明るい場所でよく茂り、ときには大きな群落をつくる。(写真撮影・和田博幸)

**スミレ**  
スミレ科スミレ属  
学名: *Viola mandshurica*  
原産地: 日本列島、中国東北部から東部、朝鮮半島  
開花期: 4月から5月

生きのびるための戦略は種子にも備わっています。実は熟すと三つに割れて、種子をはじき飛ばします。種皮には糖質などをふくんだ物質が付いています。この物質に導かれたアリの種子を巣穴まで運びます。ア

リが食べるのは甘い部分だけ。残ったタネは巣穴の外に捨てられてやがて発芽します。アスファルトの舗装した道路の隙間から顔を出すスミレは、このようにして根を下ろすのです。背丈が小さく、ほかの草花に埋もれて目だちにくいからこそ、スミレは幾重もの生存戦略を発達させました。スミレがいのちをつなぐおかげで、私たちは千年前と変わらず、春の訪れを知ることができるのです。

**スミレ**は『万葉集』でもうたわれ  
るほど、日本人に古くから親  
しまれてきた花です。明治時代、「星  
董派」とよばれた与謝野鉄幹ら『明  
星』の歌人たちは、恋愛における心の  
機微を星やスミレに託しました。西  
洋では、控えめさと誠実さの象徴と  
され、聖母マリアと関連づけて語ら  
れたり、宗教画にもしばしばスミレ  
が登場します。そうした歴史や、可  
憐な花の面影から、スミレといえは  
繊細で弱い印象をいだく人も多い

かもしれせん。  
**何重もの生存戦略で種をのこす**  
しかし、その姿に似合わず、スミレの生存戦略はたくましく、したたかなのです。スミレ属の特徴は、開花後の初夏に閉鎖花をつくることです。春に咲く開放花は、昆虫などの送粉者を介して受粉します。蜜をついたり、つぼみを開いたりするエネルギーに比して、受粉の効率はさほど高くありません。しかし、種子を遠くまで運んだり、ほかの個体と遺伝子を交換できるメリットがあります。閉鎖花はつぼみを開くエネルギーを抑えられるうえに、ほぼ確実に結実しますが、同じ遺伝子しかつくること  
ができません。

## スミレ属の 多様な生育域



北海道での調査のあいまに、ワインの町として知られる北海道池田町に。ぶどうの栽培地を見学し、池田町ブドウ・ブドウ酒研究所で醸造過程のワインを試飲。

かもしれません。  
**何重もの生存戦略で種をのこす**  
しかし、その姿に似合わず、スミレの生存戦略はたくましく、したたかなのです。スミレ属の特徴は、開花後の初夏に閉鎖花をつくることです。春に咲く開放花は、昆虫などの送粉者を介して受粉します。蜜をついたり、つぼみを開いたりするエネルギーに比して、受粉の効率はさほど高くありません。しかし、種子を遠くまで運んだり、ほかの個体と遺伝子を交換できるメリットがあります。閉鎖花はつぼみを開くエネルギーを抑えられるうえに、ほぼ確実に結実しますが、同じ遺伝子しかつくること  
ができません。

## C O L U M N

### 未来を担うみなさんに

風土論のもっとも重要な点は、現実にはかならず私たちの存在と関係しているということです。人間の存在する基盤は地球です。人間が地球上から一人残らず消えても、自然は自然のままに存在しつづけますが、その逆はありません。人間の存在には地球が必要ですから、地球や自然を守ることは当然のこと。同時にだいたいしにすべきなのは、地球上に生きるすべての人間です。

「風土論」の考えでは、すべての人間が地球と相互関係を結び、それぞれに風土と関わっているのです。(私)一人を例にとっても、人類という立場、国や地域、コミュニティなど、それぞれの文化に影響を受けて生きる人間という立場など、多様な立場をそなえています。みずからの文化と同時に、ほかの文化をも尊敬することがたいせつなのです。

(二〇一八年十二月)

## 風土論が指し示す「自然と人間の共生」

しかし、かつては船を動かす資源だった風は、動力源の進化で資源としての価値を落したり、近年は風力発電のエネルギー源になったりと、文化や

時代によって風のとらえ方は変わります。客体的な事実ではなく、「通態的」な現実なのです。そうした各々のとらえ方の先に発生するのが風土です」。

「風土学」という新しい学問領域を切り拓いたベルク博士はさらに、自然をも主体としてとらえる「自然の主体性論」を提唱します。「通態性の概念は、人間だけでなく、ほかの生物にも働いているという仮説が出発点

時代によって風のとらえ方は変わります。客体的な事実ではなく、「通態的」な現実なのです。そうした各々のとらえ方の先に発生するのが風土です」。



仙台市の浪分神社にて慰霊の参拝をするベルク博士(2012年、撮影・張政遠)。たびたび東日本大震災の被災地を訪れ、「殺風景」をキーワードに復興計画に助言してきた。

花とみどりの復興活動支援助成事業  
(花博みどりの東北支援事業)

## 大槌町鹿子踊 「神の森どろのきプロジェクト」

### ドロノキが生い茂る未来は 鹿子踊が舞う未来

花博記念協会は、東日本大震災、熊本地震で被災した青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、熊本、大分における花とみどりによる復興活動の支援を目的に、助成を行なっています。二〇二一年からこれまで九十二件の活動を支援しています。



例年行なわれる大槌祭にて、激しく舞う白澤鹿子踊。(2015年)

東北地方の岩手県と宮城県に、江戸時代に房州(千葉県南部)から伝わったとされる「鹿子踊」という郷土芸能が受け継がれています。大きな角をもつ雄鹿を模したお鹿子頭を被った踊り手たちは、念仏供養や五穀豊穡の祈りをこめて盆や秋祭りや舞い踊ります。

### 神さまが憑依する(かながら)の危機

**岩** 手県には現在も百五十の継承団体があり、大槌町には五団体が活動しています。岩手県には踊り手が演奏する「太鼓踊系」と演奏しない「幕踊系」の二つの系統が伝承されています。東梅英夫さんが会長をつとめる白澤鹿子踊保存会をはじめ、岩手県の沿岸中部から北部に伝わるのは、「幕踊系鹿子踊」です。髪の毛を模した帯状の「かながら」を装束に付けることが特徴です。かながらとはカンナガラのこと、樹齢五十年ほどのドロノキ(正式名称・ヤマナラン)の製材を薄くカンナにかけてつくり

ます。東梅さんは、かながらは踊りに欠かせないものだといいます。「これは神霊界と俗世をつなぐ依り代ですが、大規模な伐採がつづいた一九六〇年代に近隣のドロノキが減少し、や

功への確信を得て、町内の団体にも協力をよびかけました。「ふだんはライバル同士ですが、次世代につなぐという思いは同じ。地域で一丸となり、結びつきが強まりました」。

まっさきに実践したのは、防護フェンスの設置。それからは食害もなく、二〇一九年現在、苗は二メートルを超え、成長しました。「装束につかえるまでに育てるには五十年かかります。明確な目標は継承への意欲の高まりにつながっています」。

鹿子踊が披露される秋祭りは、町民たちが一年のエネルギーを燃やしつつすかのごとく、熱烈なもりあがりを見せます。「皮肉なことですが、震災をとおして、たんなる郷土芸能にとどまらない鹿子踊の力を実感しました。この植樹プロジェクトが季節をなんどもめぐりながら、地域社会にじんわりとけ込み、多彩なつながりを育む動力源になることを期待しています」。



鹿子踊では、小学生や中学生たちも踊り手として加わり、祭りを盛りあげる。

### 植樹の数日後に起こった不運をのりこえて

**地** 元種での苗づくりにこだわり、町内外を駆けめぐって、雌雄で自生するドロノキを探しました。失敗をくり返しながらも、二〇一三年に苗づくりに成功。二〇一四年四月、山の雪解けを合図に植樹祭を決定しました。「町外のみならず、日本各地やドイツからも応援にかけつけて盛大な植樹祭となり、成功への期待も

ふくらみました」。しかし、植樹祭の数日後、事件は起きます。野生のシカが新芽を摘んでしまったのです。「私たちの鹿子踊は、シカを神様とあがめています。なんて容赦ないんだと、大きく肩を落しました。食害対策に奔走するなかでたどり着いたのが花博記念協会の支援制度です」。支援をうけて、



種まき後1か月のドロノキ苗の移植作業。海外の専門家に育苗のノウハウを学ぶなど、よい苗作りのための勉強は欠かさない。



2014年の植樹祭の記念植樹。子どもたちもともに苗を植え、成長を見守る。



2018年の秋に、保存会の子どもたちとレクリエーションをかねた植樹を実施。

### 編集後記

「古来、日本人は豊かな自然に恵まれたこの国土を愛し、中でもとりわけ四季をうつろう花と緑を慈しみ、その佇まいの中に自らの心を託して参りました。皆さまご承知の万葉集には百六十種類もの植物が詠いこまれているとことです。また、盆栽、園芸、茶道、華道などのように、自然との語らいを楽しむ日本の文化や芸術は他の国に類を見ません。これは、一九八七年、私が起草した花の万博起工祝賀式での来賓祝辞の一部です。

花は緑の精、緑は生命の象徴。「自然と人間の共生」は山紫水明の国土で育まれた日本人の自然観そのものだと思います。

(編集部 S・M)

### 『KOSMOS』の 誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。



はかなく、清く、深く  
日本の伝統  
園芸植物

5

# 桜草

サクラウ  
江戸の将軍も  
ほれこんだ  
桃色の花

花弁の形や色が桜に似ていることからその名がついた桜草。拓けた森林や湿地の草原、河川敷を好み、私たちの足元に小さな桃色の花を咲かせ、春の訪れを告げます。かつては、宮廷や公家の住居の挿し花や、庭の小草として親しまれた桜草。江戸時代に園芸植物として円熟しました。江戸後期の俳人、小林一茶の句にも「我が国は草も桜を咲きにけり」と詠まれています。

## 桜

草は、春に桃色の花を咲かせ、草高二十センチほどの小さな植物です。かつては日本各地の河川敷に群生し、身近な草花として親しまれました。

江戸幕府の二代將軍徳川秀忠も桜草を愛でた一人です。鷹狩りに出向いた荒川沿いの戸田ヶ原で桜草に目



### 【南京小桜】

江戸時代後期に作出。現存する最古の品種といわれる。小型の花を咲かせる。



### 【初姿】

1955年に作出。玉咲きに近い花を多くつける。

が止まり、城に持ち帰って鉢植えにしました。これが江戸での桜草栽培のはじまりともいわれています。  
次代にタスキをつないだ  
愛好家の情熱

野生種から探した変わり花をもとに、園芸化がすすんだのは江戸時代中期のこと。江戸の町は自生地に近く、栽培時の気候条件に憂慮する必要がないことや、鉢で育てられる手軽さから、またたくまに上流階層のみならず庶民にも浸透しました。

桜草が最盛期を迎えたのは江戸時代後期の一八〇〇年代です。一七三三年刊行の『地錦抄附録』には、八つの品種が記載されていますが、この時期はまだ改良なかげで、容姿は野生種に近いものでした。その後、各地で桜草の愛好家の会が組織され、闘花会が開かれるようになると、つぎつぎと新品種が作出され、桜草の文化が花開きました。二十余年りで三百以上の品種が生まれました。

明治維新後の武士階級の没落や関東大震災での焼失などにより、なん



江戸時代後期の画家、谷文晁(たにぶんちよう)の描いた桜草の絵に、屋代弘賢が桜草を称える詩歌を書いたもの。「くさの名も桜といへは日本(ひのもと)にかきる色香の盛(さかり)みすらし」。(出典・国立国会図書館デジタルコレクション)

ども存続の危機に立たされましたが、日露戦争後にはブームが再燃し、「日本桜草会」が発足。江戸の品種の維持のみならず、个性的な新種を多くうみだしました。

桜草の園芸品種は、花色、花形、咲き形などの違いで約三百品種が知られています。そのうちの九十種は江戸時代に生まれたものです。四百年前の品種がこれほど多く保存されている背景には、何代にもわたって受けつがれた熱心な愛好家の情熱があったのです。

### 【表紙の解説】 山吹色

ヤマブキの花の色のような赤みを帯びた黄色です。ヤマブキの野生種は一重咲きですが、万葉集に詠われた十七首のヤマブキの歌には、八重咲きの品種もふくまれています。古い時代から八重咲きの品種が植栽されてきたことがうかがえます。

※お詫びと訂正  
本誌四号の二十四ページ「日本の伝統園芸植物」の「古生マツバラン類の生き残りです」の記述に誤りがありました。これは以前の考え方で、現在はDNA解析の結果、大葉類(シダ類)の系統であるとされています。

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
情報誌 KOSMOS—こすもす 5号  
2019年3月25日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号  
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524  
URL:https://www.expo-cosmos.or.jp

制作協力 ● 京都通信社 デザイン ● 中曽根デザイン

©Expo'90 Foundation All rights Reserved.